

Point Counter Point の形式

—— 多様性の表現 ——

朱 宮 晴 三

〔I〕

周知のように Aldous Huxley (1894—) は 'serious' thirties の中頃懐疑主義者から自我への無執着を説く神秘主義者へ転向し、以後においてはその基本的態度を変えていない。転向の事情は *Eyeless in Gaza* (1936), *Ends and Means* (1937) に詳しい。Huxley は転向迄の20年代を主体とする前期のうちに相当数の作品を書いているが、そのうち長篇小説は *Crome Yellow* (1921), *Antic Hay* (1923), *Those Barren Leaves* (1925), *Point Counter Point* (1928), *Brave New World* (1932) があり、短篇集は5冊を数えている。これら小説作品に共通する最も明白な特徴は、当然、それらが多かれ少かれ作者の懐疑的人生観を反映している点にある。しかし一方その他の共通的乃至は個別的特徴も種々の検討を通じて明らかにすることができる。例えば作者の精神的成長の観点からそれらの作品を、同時期のエッセイ集と共に、年代的に通読するならば、Huxley は既成観念の単なる批判者から自己の支持する観念の呈示者に脱皮する努力を、既に20年代の後半に始めていることがわかる。その努力の小説面における具体的現れとして、*Point Counter Point* に登場する D. H. Lawrence 的倫理思想⁽¹⁾ の持主 Mark Rampion の同情的描写がある。また小説論的観点に立てば、思想表現の手段としての傾向が強く人物描写が軽視され勝ちな

長篇小説に対立するものとして、'flat' ならざる 'round' な人物が登場する短篇をとりあげることも可能であるし、⁽²⁾ 同じく思想に傾いた長篇中でも、作者が人物を比較的喜劇的 detachment を以て扱いた作品、即ち、'gay' twenties の雰囲気をよく伝える *Antic Hay* や牧歌的雰囲気をもつ *Crome Yellow*, *Those Barren Leaves* に注目することも可能である。⁽³⁾ 或はまた *Brave New World* は、後年の *Ape and Essence* (1949) と共に、ネガティブな未来小説として注目される。⁽⁴⁾ さてここにとりあげた20年代最後の長篇 *Point Counter Point* (以下 *P. C. P.* と略記) は幾つかの欠点をもってはいる。先行作品にみられる喜劇的軽妙さ、陽気さの欠如、時に病的でさえある人間嫌悪感に裏打された苛烈な諷刺、登場人物の類型的描写等。しかしそうした欠点にもかかわらずこの作品が、先にふれた支持すべき倫理思想の呈示とその形式の入念さによって、Huxley の前期作品中の頂点に立っていることは疑い得ない。この小論においては *P. C. P.* の形式上の特徴⁽⁵⁾ について考えてみたい。

〔II〕

P. C. P. の形式の入念さは Huxley の前期を通じてのみならず、恐らく全期を通じて比類がない。ここでいう入念さは勿論作品の意図をよりよく達成するための入念さである。Huxley がこの作品の形式のために払った努

力の程は、最近彼がこれを自己の二つの成功作の一つに数えている¹⁰ ことから、間接的にはあるが、推察できる。彼の小説形式を論ずる時いつもこの作品がクローズ・アップされる今一つの理由は、Huxley が自己の分身として小説家 Philip Quarles をその中に登場させ、彼に小説について語らせたり、ノートさせたりしていることにある。読者は Philip によって *P. C. P.* の形式への鍵を与えられている。彼の言葉やノートを手助けとしてこの小説の形式をみることにしよう。

彼は次に手がけようとしている小説の意図を次の如くに妻に語っている。人々は様々な観点から現実の様々な面をみる (multiplicity of eyes and multiplicity of aspects seen)。例えば出来事を A は主教の見地から、B は「フランネルの下着の値段」の見地から、C は 'good times' の見地から考える。また経済学者、生物学者、化学者、歴史家等もそれぞれの見方を出来事に対してする。各々が「出来事の異った面、現実の異った層」をみている。Philip は「それらすべての人々の観点から同時にみること」(to look with all eyes at once) をしたいという (XIV)。

簡単に言えば、Philip は単純な観点からでは処理し切れぬ現実の多様性を認め、それを、多様な観点からみることによって、できるだけ完全に表現することを意図するのである。(ここで、現実是一个の出来事、一つの物、一人の人間、或はすべてを含む人生等、場合に応じて、異った対象を指示するものと考える。) また彼は「最も明白なもののもつ驚異性」(the astonishingness of the most obviousness) を表現したいとも語っているが、「明白なもの」とは一つの観点からのみ眺められた或る現実であり、「驚異性」とはその現実に関つもの観点からの光を当てた時浮び上るその異常な迄な多様性に外ならない。Philip が語るこの現実の多様性表現と

いう意図は Huxley が *P. C. P.* を書くに当たって懷いた意図であると解される。表題「対位法」はこのことを象徴的に物語っている。対位法は何ものにもまして旋律の多様性を狙う手法である。

Huxley が現実の多様性を表現するために *P. C. P.* に用いている形式の一つに会話形式がある。この小説には実に会話が多い。しかもその大部分が高度に議論的、抽象的、一般的である。登場人物達は知人、友人、親子、夫婦、恋人等の人間関係を通じて、パーティ、レストラン、クラブにおける多人数の会話に、また事務所、家庭、私室における二人の間の対話に加わり、道德、宗教、文学、政治、科学等に関する様々な問題を論じ合う。議論に当って各登場人物は問題について自己に相応しい観点からの見解を示し、その問題の係っている現実の一面をそれぞれに浮かび上らせている。XXI章の人間の意志の自由が論じられるクラブでの会話、XXXIV章の現代の生き方が論じられるレストランの会話はその典型的な例である。

この会話形式によって現実の多様性を充分に示すには出来るだけ多数の異ったタイプの人物が必要である。タイプの多寡は議論の際の観点及び見解の多寡と直接に関連しているからである。*P. C. P.* における登場人物の多彩さは全く人の目を見張らせる。民主主義者、共産主義者、ファシスト、科学者、クリスチャン、人間主義者、悪魔主義者、肉欲主義者、殺那主義者、懷疑主義者、偽善者、教養屋、ロマンチスト等々。こうした多様な人物がそれぞれに自己のタイプに相応しい観点に立って見解を表明し、そうすることによって現実の多様性を示しているわけである。

ところでこうした議論による会話形式は Huxley が出発以来とってきた形式である。*Crome Yellow* と *Those Barren Leaves* は house party に集ったインテリ達の議論が主

体であるし、*Antic Hay* にはロンドンのボヘミアン的インテリの議論が多い。唯一つの違いは *P. C. P.* においては会話がはるかにより長く、より議論的、抽象的、一般的になっていることである。

さて Huxley のこの会話形式はリアリズムの点からみて重大な欠点をもっている。彼が屢々用いる会話においては、抽象的議論が強く表面に出て個々の人物は生き生きとは感じられない。人と人が話をするのではなく、観念と観念とが衝突するという感じが強い。Huxley の会話のこうした性質とその頻度により、彼の小説が「観念小説」(novel of ideas) であって人を描く小説ではないという批評が生れる過半の原因がある。「観念小説」においては会話は必然的に多くなる。なぜなら、Philip によれば、そこでは「各人物の性格は彼が代弁する諸観念の中にできるだけ包含されねばならない。」できるだけ懐かれる抽象観念の特徴のみで人物の性格を現したいというのである。作者としては、各人物が自己の懐く抽象観念を表出することによって自己の性格を露呈すべき機会即ち会話をできるだけ多く設けねばならないことになる。普通の小説においては、人物の生き生きとした性格は、彼が懐く抽象観念によってではなく、彼の具体的行動、心理によって表されている。「観念小説」は人間を具体的に表現するという文学個有の問題をさけることにより小説の本道から外れ、むしろ討論形式のエッセイに近い。Huxley 自身このことはよく知っている。彼は Philip を通じて自分が資質的に「観念小説」家であることを認め、更に、「性来の小説家」は「きちんと系統立てた観念」をのべる「どこか現実感のない」「いささか怪物めいた」人物ばかりが登場する「作りものの」の「観念小説」は書かないといっている (XXII)。

結局、*P. C. P.* において Huxley は自己

の資性の限界⁷⁾ を十分に意識した上で、上記の如き欠陥をもつ会話形式を、現実の多様性表現のため、敢て大規模に使用しているのである。しかし結果は当然、少くとも会話の部分に関する限り、多様性を観念的に、抽象的に示すに止っている。

〔III〕

P. C. P. に用いられている今一つのより特徴的な形式は Philip が「小説の音楽化」(musi-calization of novel) と称している方法に基く形式である。Philip はベートーヴェンの弦楽四重奏曲やピアノ変奏曲をあげて、それらに使われている転調 (modulation) 或は変奏曲 (variation) の手法を小説の「構成」(construction) にとり入れたいという。したがって彼のいう「音楽化」は象徴派流の文章自体の音楽化ではない。元来転調は音階を変えることによって、変奏は音階、リズムその他を変えることによって、共に楽曲の多様性を達成する方法である。Philip の小説の「転調」、「変奏曲」は、結局、小説の構成に際して場面と地の文の多様性を達成し、そうすることによって現実の多様性を示すための手法であるといえる。

以下 Philip の説明をきき、その意義を考え、それがどのように *P. C. P.* において実現されているかをみたい。彼の説明は (a), (b), (c) の三つの場合に分類できると思われる (cf. XXII)。

(a) の場合は「突然な転調」(abrupt transition) で、Philip によれば異種の「テーマ」を「交錯」させる時生ずる。例えば A が人妻を殺している時 B は公園で乳母車を押しているというふうに描けば、悲劇的な殺人の「テーマ」とやや喜劇的な子守りの「テーマ」を「交錯」させたことになる。この手法の意義は殺人と子守りという二つの鋭く異った現

実を意味する二つの場面を同時に（実際には相接して）描くことにより、それらを包含するより大きな現実即ち人生または社会の多様性を読者に示すにあるといえる。例としてすぐ思い浮ぶのは最後のXXXVII章である。この章は二分割され初めのセクションでは、Spandrell がベートベンの四重奏をレコードできいて絶対の神を認知しえたとして、Webley の部下と渡り合い自殺に近い死に方をするのが描かれる。がすぐ次のセクションでは、丁度その頃 Burlap が雑誌経営の順調なのに気をよくして事務所から家に帰るところが描かれ、更にその夜 Beatrice と一緒に入浴して戯れるとある。章の分割が最も効果的に「突然な転調」に使われているのはXI章で、実に11分割されている。そこでは音楽会場の Tantamount 家を出た Walter と Lucy が、辿りついたレストランで Rampion 夫妻、Spandrell、ジャーナリスト達と会話をしている場面（5分割されている）に、Tantamount 家からそれぞれの家に帰った人々の場面が映画のフラッシュ・バックのように交錯されている。Burlap は精神主義的なことを口にしながら Beatrice にエロチックな行為に出ようとしている。Tantamount 公爵は助手 Illidge（この二人は Tantamount 家内にいる）と生物学上の問題を論じながら食事をとろうとしていると、兄から神の存在の数学的証明を見出したという電話をうけとる（3分割）。John Bidlake は昔の放蕩生活の遺物たる私生児を思い出し、老年を思い、沈みこんでいる。Logan 親娘は音楽会であった人々の酷評を楽しんでいる。（場面と場面は連想をさそう言葉によってわづかに繋がっている。）この外に章の分割に「突然な転調」がおこっている場合は相当多い。例えばXIV、XVIII、XXIII、XXIV、XXXIIの各章がある。また分割のない章の内でも、更に、一つのセクション内でも屢々起ってい

る。Philip は「突然な転調には、充分な人物と平行する対位的な筋」(a sufficiency of characters and parallel, contrapuntal plots)が必要であるという。このことは上にあげた例からも或程度は推察できよう。次にこの作品中の登場人物と平行的な筋のうち主要なものをあげてみる。

- (1) Sidney Quarles は民主主義について大著述をなすとふれまわっている自称政治評論家であるが、彼の頭脳は実はパズルを解く以外は無力である。彼は妻への劣等感から過去に何人もの下層階級の女と関係をもった。今回も寄る年波にも似ず若いタイピストと関係を結ぶが、彼女が妊娠しとなりこむに至ってすっかり元気を失い、死も近いと思う。妻 Rachel は聡明なクリスチャンでいつも夫の失策をカバーしている。
- (2) Sidney の子 Philip は、既にみたように、小説家で、知的生活の欠陥に気づき Mark Rampion の生活態度に憧れるが、資質上の障害を前にして如何ともなせず傍観者に止る (Huxley の面影が濃い)。生来本能的な妻 Elinor はそれが不満である。彼らは数カ月の海外旅行から帰英すると、Philip は人妻 Molly の肉体美にひかれ、Elinor はフェジスト Everard Webley の男性美にひかれる。しかし Molly は才女振るだけでキスも許さないし、Webley は Elinor との関係が成立しそうになった時殺される。一方彼らの子供は脳膜炎に患い、死ぬ。夫婦は再び海外旅行に出る。
- (3) Elinor の父 John Bidlake は老年の画家。過去には陽気な肉欲主義を奉じ何人ものモデルと関係をもち、病氣以外は家に帰らなかった。しかし今回胃痛を宜せられるに及んで自宅に帰り、死の恐怖に悩まされる。妻 Janet は神秘主義的冥想に耽り俗事に超越している。
- (4) John の子 Walter は何事も理想化する

雑誌社勤めのロマンチスト。退屈な人妻 Marjorie を過大評価し同棲したが幻滅し、Lucy Tantamount にひかれ、一夜征服する。しかし彼女は徹底せる感覚主義者で彼の固苦しさを嫌い、刺戟を求めてフランスへ行ってしまふ。彼は絶望的になる。一方身重になっている Marjorie は Rachel の影響で宗教的平安を見出している。

(5) Lucy の父 Edward は生物学者。専門以外は、殊に性については子供である。妻 Hylda は過去に John と関係をもったが決して身分を忘れなかった。現在はパーティを開いて、参加者を意地悪く観察している。

(6) Edward の助手 Illidge Babbage は下層階級の出身で、共産主義者。周囲の上流階級の人々を絶えず批判し、敵視している。Webley 殺人に加わるが、肝心な時に腰抜けになる。

(7) Everard Webley は 'British Freemen' なるフェシスト団体の主領。議会政治の無力を説き選良の独裁を叫んで遊説する。一方 Elinor に恋するが最後の瞬間に Spandrell と Illidge に殺される。

(8) Maurice Spandrell は母の再婚によりエディパス・コンプレクスに陥り、悪魔主義的放蕩家となって処女を墮落させることに欣びを見出している。絶対悪を感ずることによって絶対的善の神を認めんと、Illidge を誘って Webley を行うが、なお確信しえず、先にみたように、ベートベンの四重奏によって始めて神を知りえたとして、一種の自殺を行う。

(9) Denis Burlap は文学雑誌の編集長で偽善者。清貧とキリストの愛を口にしながら、金儲けに抜目がなく、幾人もの文学愛好者の女性と関係してきた。今回もオールド・ミス Beatrice に次第にとり入り、遂にものにす。

(10) Mark Rampion は、画家兼作家の人間主義者(D. H. Lawrence の面影が濃い)。機械文明の弊を嘆じ、人間は肉体と精神の平衡を目指すべきだと説き、妻とその主義を實踐する。

さてこの「突然な転調」は Joseph Warren Beach が 'breadthwise cutting' と名づける現代作家が 'comprehensiveness of view' を得んとして使う手法に外ならない。⁽⁸⁾ それは明白な因果関係を追求する即ち比較的単純な筋の展開を追求する、伝統的な 'lengthwise cutting' の手法と著しい対照をなしている。Huxley は多数の平行線状に進行する筋の幾つかを選びとって、同時に(勿論厳密には多少時間のずれもあるが)それらを横断的に裁断し、各横断面を場面として集中的に並べることによって突然な転調、を発生させるわけである。その際各横断面の異なり方、コントラストが大きい程「転調」の「突然」さは強められ、現実(人生または社会)の多様性はより効果的に表現されることになる。

ところで、現代英文学は 'breadthwise cutting' の輝かしい先駆的実験を既に *Ulysses* (1921) においてもっている。'wandering rocks' の挿話がそれで、そこにはダブリン市内の様々な階級、職業、年齢の人々の行為が、19セクションに分割されてほぼ同時的に描かれている。したがって Huxley の「突然な転調」は彼の創案になるわけではない。*P. C. P.* の一つの意義は、この手法を部分的にではなく全巻を通じて屢々使用することによって、横断面相互のコントラストのみならず、多数の平行的な筋相互のコントラストをも示すことに可成り成功していることにある。惜しむべきは各筋——殊に(5), (7), (8), (10)の筋——が、前章にふれた抽象的議論の頻用と地の文に屢々現れる概括論とによって、充分具作性をもって発展していないことである。

(b)の場合は普通の「転調」または「変奏曲」の場合で、Philipによれば「状況と人物の反覆」(reduplicating situations and characters)のことである。状況の反覆とは、例えば恋に陥るという同一の状況に相異なる人々がそれぞれの仕方で直面する(dissimilars solving the same problem)のを描くことであり、人物の反覆とは、例えば恋に陥り、死に瀕し、祈るという相異なる状況に同一の人が直面する(similar people confronted with dissimilar problems)のを描くことである。前者の意義は一つの状況が意味する或る現実(例えば恋という)の多様性を幾つもの場面を通じて示すにあり、後者の意義は相異なる幾つかの状況が合っして意味するより大きな現実即ち人生の多様性を幾つもの場面を通じて示すにあることは明らかである。

人物の反覆及び状況の反覆を、前にみた「突然な転調」との対比において、考える時幾つかの点が注意される。先ず「突然な転調」は平行的な筋の同時的横断によって得られたのに対し、人物の反覆は平行的な筋の進行に伴って得られている。これは次の事情を考えれば当然である。人物の反覆即ち同一の人が相異なる状況に直面するのを描くことは、言い換えてみれば、その人物を中心にした筋の展開を描くことである。したがって幾人もの人物の反覆は幾つかの平行的な筋を描くことになる。前にあげた *P. C. P.* 中の10の主要な平行的な筋は、この人物の反覆によって全巻中に断続的に描かれた筋をそれぞれ一まとめにしたものである。断続的にというのは、先ず筋の数が多く而も平行していることから章毎の筋の切替えが屢々あり、更に同一章内でも「突然な転調」による筋の横断が屢々あるからである。Philipが筋の展開といわずに人物の反覆という理由の一はこの断続性にあると思われる。次に注意される点は状況の反

覆即ち同一の状況に相異なる人物が直面するのを描くことは、実際には、人物の反覆によって生ずる平行的な筋の各々に同一の状況を設定しておくことによって行れるということである。上記10の筋のすべてに設定され、全巻を通じて最も屢々繰り返される状況は、夫婦関係及び情事関係に伴う愛または恋の状況で、読者は愛または恋の様々な面、様々なタイプを示される。また死の状況も幾つかの筋に設定されており、殊に作品の後半において屢々繰り返される。この状況の反覆の特殊な例として XXIX章及び XXXIII章がある。前者においてはファシスト Webley の演説のもつ様々な面が、後者においては死のもつ幾つかの面が、それぞれ数人の人々の反応を通じて同一章内に集中的に示されている。これらは平行的な筋の各々に同一の状況が、ほぼ同一時点において設けられている特殊な例である。一般的にいて、人物の反覆及び状況の反覆は平行的な筋の注意深い形成に沿って得られ、「突然な転調」は平行的な筋の同時的横断即ち筋の一時的な無視によって得られる。そして三者共に現実——より大きなものであれより小さなものであれ——の多様性を示すために行われる。以上から更に次の点が注意される。人物の反覆及び状況の反覆は、筋の形成という全体的な配慮を要する問題を解決しつつ行わねばならぬ故に、技術的には筋の無視に基く「突然な転調」より難しい。しかしそれらは複雑な多様性を狙いつつ而も作品の統一を守らんとすれば不可欠な手法である。若し後者のみによって多様性を極度に求めれば、作品は筋の度重なる無視から救いようのない混乱に陥ってしまう。*P. C. P.* においては両者が巧妙に駆使されている。

最後に(c)の場合は、作者が「神の如き創造の特権」をもって物語中の出来事に様々な観点から考察を加え、現実の多様性を示す場合

である。この場合の「転調」または「変奏曲」は、前記(a)及び(b)の場合が場面の變化を伴ったのに対し、それを伴わないが、客観描写所謂地の文の一箇所で行われるので、効果は著しい。例えば次のバッハの音楽の描写は屢々引用されて有名である。

「Pongileoni の吹く〔フルートの〕音と無名のバイオリン奏者のこする音とが大ホールの空気をふるわせ、それに面した窓を振動させ、次いでその振動は遠くに隔れている Edward 卿の部屋の空気をふる寄せた。ふるえる空気は Edward 卿の鼓膜をがたつかせた。からみあったついで髓骨、らん砧骨、とう鐙骨が動かされた卵形の窓の膜を刺戟し、内耳の液体にかすかな嵐をひきおこした。聴覚神経の細毛末端は、荒れ狂う海の中の海藻の如くにゆれた。無数のわけのわからない奇蹟が脳の中で行われて、Edward 卿は「バッハ」と恍惚としてささやいたのであった。彼は嬉しそうにほほえみ、彼の目は輝いた。乙女が一人で漂う雲の下で歌っていた。やがて雲のように孤独な哲学者が詩的な瞑想を始めた。」(III)

Edward 卿がほほえんできき耳をたてる迄は音響学的、生理学的な見方がなされ、それ以後は審美的な見方がされている。バッハの音楽がもっている科学的な面と美的な面とが描かれているわけである。この外類似の多面的描写の例は数多いが I 章にある Marjorie の胎内にいる赤ん坊の描写、XXXIII 章にある Webley の死体の描写及びその死体を前にして Illidge がふるえている二時間の描写は目立っている。

(IV)

以上 P. C. P. における現実の多様性表現の意図、その意図を果すために用いられている会話形式及び「小説の音楽化」に基く形式についてみてきた。ここでこうした意図や形

式と深い関係をもつ Huxley の一般的文学観、倫理思想に少しくふれてこの小論を結びたい。Huxley によれば、作家が直面すべき最大の困難事は「あの無限に複雑で神秘的なものである現実 (that infinitely complex and mysterious thing, actual reality) を文学によって充分に表現すること」である。さて現実そのものは決して表現できない。精緻を極めた理論も最も入念な描写も複雑極る現実な粗雑に乱暴に単純化したもの (simplifications) でしかあり得ない。しかし一方単純化ということは或程度迄は必要なことでもある。何ら単純化の施されていない即ち何ら人手の加っていない生の現実の意味以前のものである。それ故これらの事情を意識する「非古典主義的自然主義作家」の関心事は「可解性 (comprehensibility) と即ち人間からみて意味ありと思われるものの表現と両立する最小限度の単純化は何か」を見出すことである。この見地からすれば古典主義は、それが普遍性を達成するにもかかわらず、「削除と集中と単純化」を強調することによって複雑な現実を充分に表現するという最大の困難事を避けていることになり、Huxley は古典主義作家と呼ばれることを拒否する。⁽⁹⁾

また彼によれば、現代作家は「作家が考えてみたいと思うどんな孤島のような問題（例えば一人の人物とか一つの物語とか）からも外れて、涯しなくあらゆる方向に無限にひろがる無関係な事物、出来事的大海原——即ち全体的真理」を意識せざるを得ない。したがって彼は「全体的真理」たる全人間経験のうちから悲劇的乃至は英雄的要素のみを取り出すことを要求する文学を書くことには困難を覚える。⁽¹⁰⁾

Huxley は単純に悲劇的效果や古典主義的統一を求めることによって処理し切れないところの余りに多い「全体的真理」、「あの無限に複雑で神秘的なもの」を意識し、彼がそ

れに「最小限度の単純化」でもって近づこうとしたところに *P. C. P.* の意図及び形式が生れたのである。

そして更に注意すべきは、彼の文学観に窺れる現実多様観は、彼がこの作品で *Rampion* を通じて呈しようとしている倫理思想と深い繋りをもっていることである。*Rampion* の人間は精神と肉体の平衡をとって全体的に生きるべきだとの意見 (cf. XXXIV) は、多様な精神的、肉体的存在物たる人間を一面的に割切ることを要求する既成の生き方に対するアンチテーゼとして提出されており、彼以外の殆どすべての登場人物は何らかの意味で一面的な生き方をしているものとして描かれている。

(註)

- (1) この倫理思想は、エッセイ集 *Do What You Will* (1929) に 'life-worship' として一層体系的に述べられている。
- (2) cf. Jocelyn Brooke, *Aldous Huxley*, p. 14
- (3) cf. 'A Critical Symposium on Ald-

ous Huxley' (in *The London Magazine*, Aug. 1955, Vol. 2, No. 8)

- (4) cf. 中橋一夫「ハックスリーのユートピア」(「二十世紀の英文学」, 研究社, 掲載)
- (5) これについては既に多くの人が述べている。中でも F. J. Hoffman の 'Aldous Huxley and the novel of ideas' (in *Forms of Modern Fiction*), J. W. Beach の 'Counterpoint: Aldous Huxley' (in *The Twentieth Century Novel*), 中橋一夫氏の「ハックスリーの方法」(前掲書掲載) は秀れている。この小論もこれらに負うところが大きい。
- (6) 今一つは *Pime Must Have a Stop* (1645)。cf. 日本読書新聞, 昭和33年12月15日号。
- (7) cf. *Proper Studies* (1927), p. 56 Huxley は抽象的思考は得意だが、事物のイメージを思い浮べるのは不得手であるといっている。
- (8) cf. 'The Breadthwise Cutting' (in *op. cit.*)
- (9) *Vulgarity in Literature*, § IV
- (10) cf. 'Tragedy and the Whole Truth' (in *Music at Night*)